

先ほどご紹介にあずかりました照木でございます。私とロータリーとの最初の関係はずっと前でございまして、私の教えた学生がロータリーのお助けをいただいて留学したいというので推薦状を書いて欲しいといわれました。その学生は私の見るところ、非常に優れた学生でしたので、あなたのためなら推薦状を書きますと。それでお相手がここにいらっしゃる方を含むロータリークラブということでありましたので、推薦状に「この学生を留学させることは本人のためになるのは勿論ですが、日本国のためになります。」と書きましたら、それをそのまま受け入れてくださりまして、彼女はカナダギール大学に留学し、修士、後に博士課程も終えて帰国いたしました。現在は文教大学の多分教授をしております、同時に日本英語教育学会の副会長をしており、私がこの学生が日本国のためになると言ったのは嘘ではなかったことが証明されました。その時に助けていただいたのをここで皆様方に篤く御礼を申し上げます。

今日はお知らせいたしましたように「ノムラオサカズ」という方の話をいたします。「ノムラオサカズ」というのは「オサ」は「長い」という字、「カズ」は「一」でありまして「野村長一」という人をご存知という方はここにはいらっしゃるのではないかと思います。この方は本名の他にふたつ名前がありまして、野村あらえびすと言え、ああ、レコード収集で日本一の方、とご存知の方もいらっしゃるかもしれません。当時SPレコード1万枚を集めて盛岡の野村記念館には今でも7000枚が現存しております。

SPレコードは、昔は高価なもので、直径30cm、片面5分というものです。裏表で10分というもので、それが当時は1枚500円くらいしました。「当時」というのはラーメンが30円の時代でした。それを1万枚も買うというのは容易ならぬことだったと思います。野村さんは盛岡出身でお父様が亡くなられて東京帝国大学を中退なさって報知新聞の記者になられました。その後、社会部長、学芸部長も勤めた方ですが、それでもNHKか野村さんかと言われるほどレコード収集ができたのは3つ目の名前があったからです。

「野村あらえびす」。「あらえびす」は報知新聞以来、音楽の紹介の「ユーモレスク」というコラムを持っていた。そして音楽のことを書くときに「あらえびす」という名前をお使いになりました。それからもう一つの名前は「野村胡堂」という名前で、これは皆さんご存知の通り銭形平次捕物帳の作者です。銭形平次はテレビでは大川橋蔵が演じて人気がありましたが、昭和のベストセラーでありましてその印税は経営に息詰まったソニーを救ったこともあるくらいであります。それが1万枚のレコードを集める原資となりました。

私が野村さんを知ったのは、まず野村あらえびすさんで『楽聖物語』という本によってであります。ガクセイは音楽の聖人と書く音楽家に関する物語であります。野村さんはもう一冊『名曲決定盤』という本を出してございまして、指揮者の小澤征爾さんはこの『名曲決定盤』によって音楽の世界に入ったと言っておられます。当時このどちらの本も古本でしか手に入らなくて、しかも『楽聖物語』の魅力は巻末にあるレコードの情報にありました。この本はまずヘンデルに始まりチャイコフスキーに至る15人ほどの音楽家の話がありまして、その巻末にレコードの情報がついていたわけです。最初はヘンデルでありますから、当然のことながらヘンデルの代表作《メサイア(救世主)》という12月によくやられるようになった曲ですが、このレコードの紹介がありましたけれども、買うことができない。つまりイギリスでトーマス・ビーチャム卿の指揮で18枚のレコードが出たというのですが、日本には2組しか入らなかった。1組は野村さんが持っていて、もう1組はNHKが持っていたわけです。しかしながらSPレコード、5分かけて裏返します、お待ちくださいというわけにはいかなくて、《メサイア》は誰も聴いたことがなかったわけです。

その他に、私はフランス文学をやった関係でフランスのものと言うと、例えばフランク、フォーレという作曲家がフランスにいますが、そのヴァイオリン・ソナタが非常に美しいものであるということはこの『楽

聖物語』で教わりました。その後、ギャロアモンブラン、ジュヌビエーブジョアというヴァイオリニストとピアニストが日本に来ましてそれでフランクやフォーレのソナタ、あるいはドビッシューのソナタを聴くことができました。私が外来の演奏家の演奏を聴いたのはこれが最初であります。

『楽聖物語』に戻りますと、ヘンデルの《メサイア》という曲が、野村さんに言わせれば「世界で一番の曲である」と。1 曲しか持っていきることができないのであればこの曲だけを持っていくと書いてあるのですが、2 組しかないその曲は日本ではラジオでも演奏されることがありません。したがってハレルヤ・コーラスくらいしか皆は知らない。どうしたらいいかと思っていたら、東京芸術大学が多分昭和 30 年頃であります、日比谷公会堂で《メサイア》をやるというのです。それで是非聴きに行こうと思って聴きに行ったら、なるほど素晴らしいものであります。大いに感動してもう一度というふうにさかんに拍手いたしました、あんな長い曲をもう一度やることはありません。それで終わりであります。

一年経って、また暮れに東京芸大がやると言うのもう一回聴いてそれで終わり。三年目にもう少し工夫をしなければと思って、どうすればいいか。多分これをやるために練習するはずである。練習から聴けばもう少し詳しくこの曲を知ることができるだろうと思い、東京芸大は大学だから掲示板に練習日程が書いてあるはずと思って芸大に行きました。そしたらなるほど奏楽堂において何時からというふうに日程がありますので、2 週間ほど通いました。それでわかったのですが、こういう長大、難解な曲というのは一遍聴いただけではダメであって、何回も聴く。できればそれに加わることがその曲を理解するための一番よい方法であるということがわかりました。

その次に、たまたま私が成城に引っ越ししたら、成城の講堂でバッハの《マタイ受難曲》をやる。ゲネプロというだいたい出来上がったものを作って、本番の少し前にやるというゲネプロを聴きに行き、本番も聴きました。この《マタイ受難曲》はバッハの作った最高傑作であります。ということは人類の作った最高傑作であります。そこで成城合唱団に入ってマタイを演奏する方に加わることができないか、と思ひまして。これはなかなか難しいことではありましたが、詳しい話をしますと長くなりますが、結局この合唱団に入ることができました。

ただ《マタイ受難曲》はやったばかりでありますからすぐにはやらないだろうけどいずれやるだろうと。ヴェルディの《レクイエム》とか、モーツァルトの《レクイエム》とか、あるいはベルリオーズの《ファウストの劫罰》というようなものを歌っているうちに、やがて《マタイ受難曲》をまたやるということになりました。27 年間おりましたが、3 回歌うことができました。

これはいわば野村さんのおかげであります、野村さんは岩手県盛岡の出身であります。明治 35 年盛岡中学校を出て、その後、旧制第一高等学校に入学いたします。盛岡中学校では、後に首相を務めた米内光政(よないみつまさ)、軍令部長をやった及川古志郎(おいかわこしろう)あるいは金田一京助、石川啄木。そういう人達に囲まれ影響を受けました。更に第一高等学校では校長であった新渡戸稲造を尊敬し、そのつながりで内村鑑三の無教会派の人々と親しくなりました。また弁論部に入りまして、前田多門と知り合い、子供達を含めて生涯深い関係を結びました。

前田多門という方は一高、その後東京大学を出て内務省の官吏になりまして、戦争中、新潟県知事、その後、日本を代表してスイスにある日本の機関にお勤めになりました。その後文部大臣もなさいました。そのお子さんが前田陽一というかたです。前田陽一さんは実は野村さんの息子さんの一彦さんと旧制成城高等学校で友達となります。もうひとり松田智雄と親しくなります。

この前田陽一さんはフランス文学、それから松田智雄さんはドイツ経済史で東大教授となります。一彦さんは東大に入って音楽美学を選考中に結核で夭折いたします。一彦さんは前田美恵子、前田美恵子さんは前田多門さんのお嬢さんであります、相思相愛の仲であったのですが、一彦さんが亡くなられたためにその後、神谷さんと結婚して神谷美恵子という女性の神学者として高名な方になります。

前田陽一さんは日本一フランス語がうまい方ですが、妹が自分よりもフランス語ができるのはどうも具合が悪いと言ったくらいフランス語もおできになったそうであります。この野村家、前田家、松田家の三家は東京の成城で近くに住んでおり、軽井沢の南原にそれぞれ家があって非常に親子とも親しくなりました。野村さんの次女の瓊子(けいこ)さんと松田智雄さんは結婚するのですが、瓊子さんも結核で亡くなり、その後三女の稔子(としこ)さんと松田さんは結婚しております。

ついでに言えば前田さんにはもう一人勢喜子(せきこ)さんというお嬢さんがいてこの方はソニーの井深大さんと結婚しその仲人を野村夫妻が務めておられます。野村さんはこういうふうに報知新聞で社会部長、学芸部長をなさってさらにクラシックレコードの知識を使って日本にクラシック音楽を導いた人ですが、更に学芸部長に挿絵入りの連載小説を連載させることを考えまして、吉川英治に『江戸三国志』を書かせています。その後部長職を退いて相談役となった胡堂は子供の健康のために野村さんお子さんがおふたりとも結核で亡くなられたということで健康があまりよくなかったということもあって鎌倉の稲村ヶ崎に転居いたしまして、少女小説などを執筆し、そのうちに第一高等学校のドイツ語教師でありました菅虎雄さんの息子、菅忠雄さんという方が文芸春秋にいたのですが、その菅忠雄さんの依頼で『雑誌オール読物』が創刊されたときに岡本綺堂の『半七捕物帳』のようなものを書いてくれというふうにいわれ、それがこの『銭形平次捕物帳』のはじまりであります。これは非常に好評で長く続くこととなります。全部で383編あると言われていています。

ソニーは元東京通信工業という小さな会社で盛田昭夫さんと組んで、アルバイトに来ていた声楽家の大賀典雄さんを入れて音響メーカーとなったのですが、潰れそうになったことがあります。その時、野村さんは私財を投じてこれを助けました。その時、新聞では「平次、投げ銭でソニーを救う」と言われたものでありますが、ソニーを救ったことがあります。

ソニーはその後立ち直って、あのときはお世話になりましたとお金を返しに行ったのですが、野村さんはどうしても受け取らず、ソニーは株券を渡しました。現金と違って株券はソニーの隆盛と共に価値が上がり、昭和38年頃に時価1億円となりました。その頃の1億円というのは、当時ラーメンが50円、私の月給が3万円ちょっとという時代でありますから1億円というのは非常に大きなお金でありました。

野村さんはそのお金を元にして「野村学芸財団」を作りました。「野村学芸財団」というのを初めて聞いたときには、野村證券もすごくえらいことをなさると思っていたのですが、実は違ひまして、これは野村胡堂さんがなされた個人の財団であります。野村さんは財団のお金で、というのは自分のお金であります。学問、芸術に関わる学生達を援助するというにしました。高校生、大学生、大学院生、研究者に奨学金を与えることにいたしました。そしてこの奨学金は返還の必要はないと各人におっしゃいました。

私も国から奨学金をもらいましたが、それは返さなければならなかった。何故か私の家内も奨学金をもらっていて、二人分の奨学金を返すのは本当に大変でございました。家のローン、娘の授業料、奨学金と本当に苦労いたしました。この野村さんのお孫さんに当たる住川さんという方に、野村さんの話を聞くためにお会いしたときに、私ももらったけれども苦労したと話したら、申し込んでくださればよかったのに、と言われました。昭和38年にこの財団が出来ましたが、私は昭和38年には教師になりましたので間に合わなかった。残念な思いをいたしました。

野村さんは音楽が好きということもあって、奨学金を出した半分の方は音楽家でした。当時、日本から外国に行くのは大変なことでありまして、それを助けました。第一号は嶺貞子(みね さだこ)さんで、後にお帰りになってから東京芸術大学教授になった声楽家の方です。半分が音楽家で他は学問の方ですが、どういう方が奨学金を受けたのかと思って野村学芸財団にリストを見たいと言ったのですが、これは個人情報だからというのでさすがに見ることはできませんでした。でもその中には、例えばフランス文学でいえば田村毅(たむら たけし)さんという方が、ネルヴァルの研究をして奨学金を受けて、

現在東京大学の文学部の教授になっております。

初代の理事長は日銀総裁でありました山際正道(やまぎわ しょうどう)さんが就任いたしました。後に井深大さんが後を継いだ。そして実務はクレモリオさん、松田智夫(まつだ ともお)さんが担当いたしました。顧問には澁沢敬三、諸井貫一、金田一京助、上代タノ、茅誠司、松本重治、野村光一、野村さんはピアニストというよりも音楽評論家です。水上さん、というような方が財団の理事として名を連ねております。

財団が発足して 2 カ月後に野村さんは亡くなっております。財団はその後活動を続け、現在も基金はまだ 1 億円ほどあるそうです。援助を受けた人達は 2014 年までに 1,162 名と聞いております。その人達は「堂子会」を作って学恩に報いるべくいろいろな方面で活動しております。

以上のように野村さんの活動分野は広く、恩恵を受けた人は多く、その影響は直接、接する機会がなかった人にまで及んでいるのでありますが、その人物は控えめで、その優しい心は日本人に共感を与えるものであり、銭形平次親分が岡っ引きでありながら人気を呼んだのも、むべなるかなと私は思っているところであります。

このロータリーも野村さんと同じように、いろいろな方面でお力を貸してくださっているということをよく承知しております。ただ、個人でこういうことをなさった方が前に在ったということをお話して、これからもここに集った方々、あるいはこれからロータリーにお入りになる方が、そういう若い人達のために力を尽くして下さることを願って、この話を終わります。どうもありがとうございました。

<閉会点鐘:黒岩会長>

照木先生をはじめ、大変な研究者・先生方がいらっしゃるわけですが、やはり人の話は聞いてみるものだと私は思いました。私も学生時代から下手の横好きでエレキギターを今でも続けているのですが、園山さんのようなジャズの王者もいれば野村あらえびすさんのような方もいらっしゃる。野村あらえびすさんがレコードを収集され、そういうものを通じて資産経営だけではなく、若人のためにそれを投じて道を拓いて行かれた。またその点を照木先生は我々に伝えたかったのではないかと思います。

私共のロータリーもまだ半年くらいでございますが、そういうボランティアの神々のような方を一生懸命学び、参考にしながら、今後共、皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っております。照木先生、今日は貴重なお話、本当にありがとうございました。それでは第 36 回目の例会を終了させていただきます。